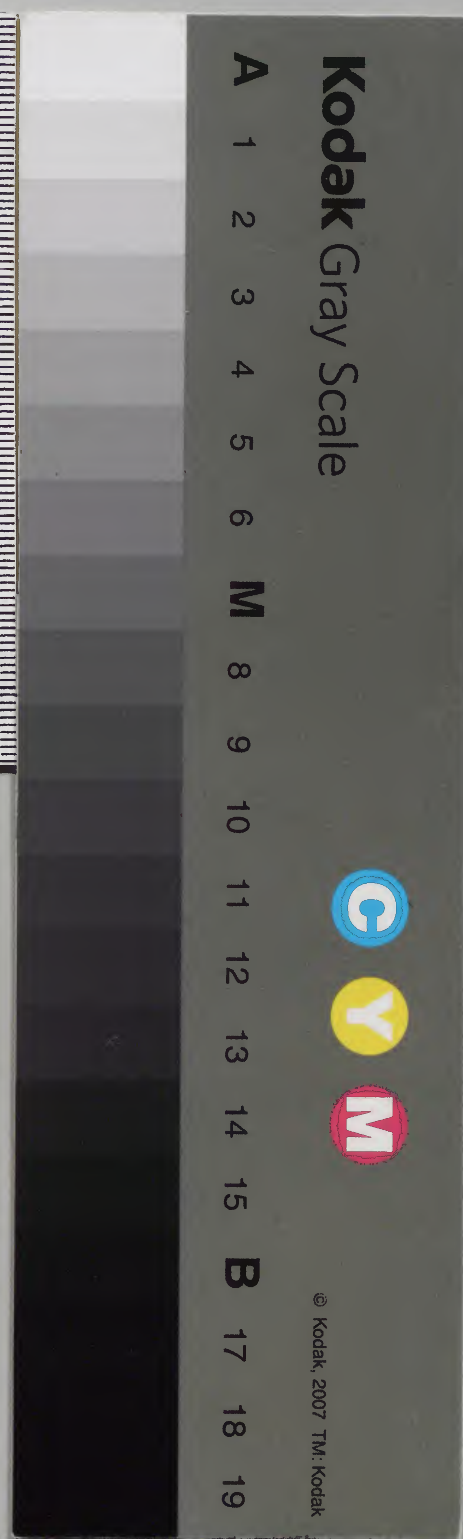


家忠日記

庫文閣内		内
一六三函	二二八七五號	和書
三架	一〇册	

		和書門
一〇册	九九函	二二八七五號
架		

内閣文庫	
番號	和 22875
冊數	10 (1)
函號	163 55



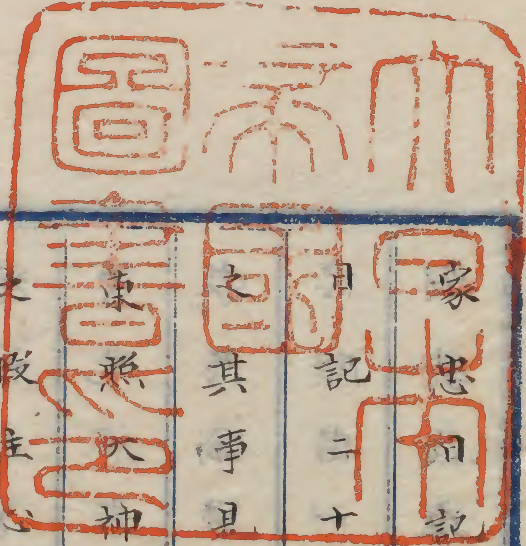
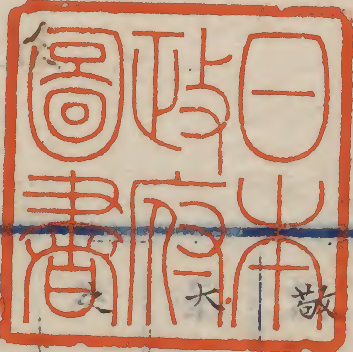
糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



家忠日記

一

家忠日記



家忠日記

增補追序

其事且

護題家忠奉後
其孫忠冬增補之追加

其

君戰功超群而義死於伏見城平生馳驅

之暇注

於算抄可謂奇士也往年故尾陽亟相源

敬候編

神君年譜時借家忠日記於主殿頭源忠房以考

決傳說紛々之疑忠房者忠冬之家宗也然忠

所記者起於天正五年丁巳終於文祿三年甲午其

間十八年也忠冬惜其不全欲顯祖先累世之忠義

間十八年也忠冬惜其不全欲顯祖先累世之忠義

所記者起於天正五年丁巳終於文祿三年甲午其

間十八年也忠冬惜其不全欲顯祖先累世之忠義

所記者起於天正五年丁巳終於文祿三年甲午其

間十八年也忠冬惜其不全欲顯祖先累世之忠義

所記者起於天正五年丁巳終於文祿三年甲午其

增補追序

而以其舊記為本增補其前追加其後自

清康君誕生至

大神君薨逝凡百有餘年編尋廣求刪繁正誤自

筆之歷三五春秋而遂能成總二十五卷其勞意可

謂勤矣其所補加者倍蓰於家忠然號家忠日記以

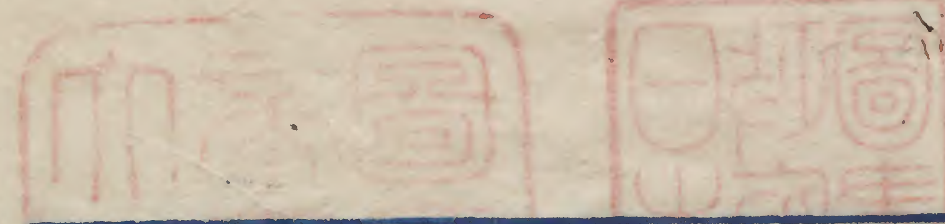
增補追公辨之其不匿祖名不旌己勞者可謂孝余

曾見其家譜高祖好景曾祖伊忠至家忠三世死事

家忠嫡男忠利者忠房父也忠利弟曰忠一其次曰

忠隆忠一亦戰死於大坂之役死子忠隆蒙 鈞命

嗣其後迨社



台德院殿叙後五位下號兵庫頭未及登庸而卒長
子曰忠行其弟乃是忠冬也其世系的、可以知焉
熟原本朝中華之事跡竭忠立功者不為不多然四
世相繼沒於兵刃相替之間者幾希嗚呼君正則臣
直乃知有

大神君之雄偉而乘世勇壯之士也然則一書匪啻
述先祖之忠而

大神君之武德及諸家之功勞永傳千萬世也蓋其

忠冬之寸丹乎其修遺書者子孫孝也况於增補追

加之詳哉忠冬之志誰不感歎哉余與忠房交際年

忠冬

忠冬

久忠冬亦相和頃聞來訊以談其事求其序何為默
止哉聊述其大概乎於其首
寬文三年癸卯仲秋
向陽林子

...

内務省

家忠日記增補追加發題

主殿助家忠ハ源姓松平氏其先和泉守信光ヨリ
出タリ信光ハ神武天皇ヨリ五十六世清和天皇
廿代ノ後胤ナリ清和天皇ノ御子ヲ貞純親王ト
イフ也ハ中務大臣神祇伯棟親王ノ女貞親年中
三月十三日誕生延喜十六年五月七日薨ス貞純
親王ノ御子ヲ經基王トイフハ六孫王鎮守府將軍
正四位上也ハ右大臣源ノ能有ノ女寛平二年二
月十三日誕生天德二年六月十五日源ノ朝臣ノ

家忠日記

姓ヲ賜ル同年十一月十日經基卒ハ經基ノ嫡子
ヲ滿仲トイフ^{多田}鎮守府將軍正四位下也ハ
播ノ繁子延喜十二年四月^{十日}誕生寛和二年八月十
九日出家法名滿慶長徳三年八月廿七日滿仲卒
ス滿仲三男ヲ賴信トイフ鎮守府將軍從四位下
母ハ大納言元方ノ女安和元年二月廿九日誕生
長元三年九月二日^日敕命ヲ奉リテ前上總從平
ノ忠常ト孿イトミ戰フ同四年四月廿八日忠常
遂ニ降ル永義三年九月朔日賴信卒ス賴信嫡子
ヲ賴義トイフ鎮守府將軍從四位下也ハ修理ノ

命婦正曆五年四月八日誕生永義五年敕命ヲ義
リ^所安倍ノ貞任ヲ追討ノ夕ノ奥列ニ下向ニ彼
ト戰フ事數十度天喜七年九月十七日厨川ノ合
戰ニ勝テ貞任宗任藤原ノ經清等ヲ誅ニテ洛ニ
歸ル此度ノ間十三年九月八日首ヲ切ル計一万五
千人各ソノ耳鼻ヲトリテ^一堂ニオサメテ佛舎
ヲ建立シテ再納寺ト號ス此功ニヨリテ伊豫守
ニ任ス永祿二年十一月二日賴義卒ス賴義ノ嫡
子ヲ義家トイフ鎮守府將軍從四位下也ハ上野
ノ直方ノ女長久元年八月十九日誕生永義元年

内
義家

正月十一日八幡ノ社ニ於テ元服世ニイハユル
八幡太郎是ナリ天喜五年父頼義ト共ニ奥列ニ
下向ニテ亦倍貞任ヲウツ合戦教度ニ及フ時ニ
十八歳ヨク強弓ヲ挽ク變化神ノ如シ兼曆三年
八月宣旨ヲ蒙テ土佐守瀨國房佐渡守源重宗
ヲ討寛治六年清原武衡家衝逆意アリテ武威奥
羽ニ震フ義家彼ヲ追討トシテ奥列ニ對向ニシ
バニハ是ト戦ヲイト山事三年ニシテ遂ニ金澤
ノ柵ヲ落シ入武衝ヲ擒ニシ家衝ヲ殺ス喜美元
第七月四日病ニ依テ出家ス同年八月十八日義

家卒ス義家ノ三男ヲ義國トイフ母ハ春宮亮百
綱ノ女下野國呪利ニ移リテ上野父敦基カ塔ト
ナリテ足利式部大輔上院ス威儀曲礼ヲ撰テ
家ノ法式ヲ定ム仁平四年三月十六日出家久壽
二年六月廿六日義國卒ス義國嫡子ヲ大炊助義
重ト云母ハ上野父敦基ノ女初テ新田ト號ス上
野國寺尾ノ城ニ居ルミツカラ源家ノ嫡流ヲ以
テ故ニ頼朝ニ懇ヒス自立ノ志アリイマタ果サ
ズ建仁二年正月十四日義重卒ス春秋六十八歳
慶長十六年三月廿二日

大神君ノ御執荼ニヨリテ 教ニテ鎮守府將軍
 ヲ贈ラル義重ノ四男ヲ四郎義春トイフハシメ
 テ徳川ト號ス義季ノ次男ヲ新田弥四郎賴氏ト
 イフ三河守ニ任ス賴氏ノ次男ヲ世良田次郎教
 氏トイフ教氏ノ嫡子ヲ世良田次郎家明ト云家
 明ノ嫡子ヲ世良田孫次郎滿義トイフ新田義貞
 ニ與ニテ共ニ軍功アリ義貞没ニテ滿義亂ヲサ
 ケテ世良田ニ居ル滿義嫡子ヲ世良田次郎政義
 トイフ又右京亮 政義ノ嫡子ヲ修理亮親季トイ
 フ親季ノ嫡子ヲ左京亮百親トイフ百親ノ嫡子

ヲ親氏トイフ永享元年親氏故有テ止列世良田
 ヲサテ西ノ方參列ニ往テ松平ノ郷ニ移ル時
 ニ松平ノ郷主松平太郎左衛門左京ノ信重男子
 ナキニヨリテ親氏ヲ婿トシテ松平ノ郷ヲ相傳
 ル故ニ親氏松平太郎左衛門ト號ス康正二年四
 月廿日親氏逝ス法名芳樹院俊山徳翁親氏ノ嫡
 子ヲ太郎左衛門泰親トイフ又世良田 三河國目
 代トナルハシメテ若津ノ墨ヲ築キ亦岡崎ノ城
 ヲ築テ松平ノ郷ヨリ是ニ移ル其年九月三日泰
 親逝ス法名良祥院秀岸祐金泰親ノ嫡子ヲ和泉

守信光トイフ岡崎ノ城ニ居テ武成ヲ近境ニ震
 安祥ノ城ヲ攻取三州三分一ヲシタカヘ領シ
 テ後岩津ノ城ニ移リ住ス長享二年七月廿二日
 信光逝ス法名崇岳院自堂信光信光ノ嫡子ヲ石
 京亮親忠君ト云是
 大神君ノ御先祖ナリ氏族ニナ是ニ属ス親忠君
 ノ庶弟ヲ忠景トイフ是主殿助家忠カ祖ナリ忠
 景カ嫡子ヲ忠定ト云忠定三列岩津ニアリテ
 郡小美村ノ郷主岩津氏トシバシバ戰テ其村ヲ
 攻得タリ既ニシテ同郡深溝ノ城主大場氏ヲ討

テソノ城ヲ陥レ是ニ移リ住シ深溝ヲ以テ家號
 トス享祿四年辛卯六月忠定卒ス其子大炊助好
 景忠定カ封ヲ嗣テ深溝ノ城ニ居ル大神君ト
 奉仕ス弘治二年丙辰名命ヲ蒙テ三列中島ノ
 城主板倉彈正ヲ攻撃本書小書板
 天正五年丁巳ニ記テ文祿三年甲午ニ終ル凡其
 年曆十八年ニ至リマ今忠冬祖父ノ深志理臨以
 ル事ヲカナシミ遠ク原又因テモトメテ或ハ増
 補或ハ追加ニ繁刪正謬ニテ三十五年家忠カ
 日記ヲ本トシテ板取ヲ継述タリ其始ハ清康

君の誕生永正八年辛未日ハシノテ其スハハ
 大神君薨御元和二年辰ニ至ル年記百百餘年也
 慶長十九年元和元年撰別大坂ノ西陣ト今書己
 其大綱ヲ盡ス故ヨツテ詳ニ記サス
 二ナリ又是ヲ號テ家忠カ日記ト云後ノ識者是
 ヲ正サバ僥倖而已
 此書ハ
 本意ハ
 其意ハ
 其意ハ
 其意ハ

元禄例

一此書元禄ハ楷行ノニ體ヲ交ヘツナクニ片
 後字ヲ以テカキタレト今寫スニ二體ハ草書
 カヘツナクニヒラカナヲ以テス家忠カミツ
 カラカテル書ニコレハナリ且童蒙ヲシテ讀
 安カラシムンカ為メナリ
 一元禄二十五卷トス元禄十五年板革ニテ五冊
 トス今ヤ予書寫スルニ及ニテ元禄々著述ナ
 セルモノノ深意ヲ失ハシモ本意ナシトアラ
 タメテモトノ二十五卷トス然レトモ日記ノ

手ブリナレハ事アレハ記シ事ナケレハシルサ
 スサレハ年月ヲ渡リテシカモ紙敷キアリ
 月日ヲ経スシテ多キアリ故ニ程ヨク是ヲワ
 カツノミ
 一元本條中ノ大事ヲツマミ上ケテ卷毎ノ標題
 トスニ重ニ事ヲ記シテ讀ニ迷ヘリ故ニ是ヲ
 ハブキテ直ニ佳境ニ至ラシメント欲スルノ
 ミ
 橋光貞

家世日記増補卷之一

永正八年癸未

三河安祥ノ城ニ於テ清康君誕生 世良田二郎

大永三年癸未

清康君皇考信忠君ノ讓リヲ受給フ 于時三河

安祥ニ御在城

大永六年丙戌

四月小

松平澤正丸衛門尉三河岡崎ノ城ニアリテ同國

山中ノ城ヲ兼守リテ其城ヲ西三河ニ震ヒシハ

三河東三河ヲウカ、清康君兵ヲ起シテ山中
 ノ城ヲ攻取又岡崎ノ城ヲ拔ニト謀リ給フ岡崎
 清康君起ルニ及テ彈正左衛門尉請テ清康君ヲ駕トシ
 フ是ニ依テ彈正左衛門尉請テ清康君ヲ駕トシ
 ツトニ岡崎ノ城讓ル清康君安祥ノ城ヨリ岡崎
 ノ城ニ移リ給フ是ヨリシテ西三河ノ諸城清康
 君ノ威風ニノソミミナ星ヲムナシウニ鎮ラフ
 此年清康君ノ嫡子廣忠君誕姓童名竹千代君
 當家御家入三譜代トイフハ安祥山中岡崎此

三所ニ於テ奉仕スル士ヲイフ親忠君ヨリ清
 康君ニ至リテ四代安祥ニ御在城ノ間奉仕シ
 サフラヒテ安祥譜代ト云其後清康君山中
 城ヲ攻トリ岡崎ノ城ニ移リ給フノ時奉仕ス
 ルノサフラヒテ山中オヨビ岡崎譜代ト號ス
 享祿二年己巳
 廿六日三刈吉田ノ城主牧野傳藏ヲ御征伐トシ
 テ清康君師ヲ帥テ岡崎ノ城ヲ發シコトコトク
 攻ホ口ホシ給フ

享祿三年庚寅

松平

清康君イタサヲヒキ井テ三州宇利ノ城ヲセノ
 ウチタマフ松平内膳正信定長親君ノ三男
清康君ノ叔父松平
 右京亮親次ヲ以テ大手ノ首將トシ清康君ハ城
 ヲリウシロノ山ニ陣シタマフ城主熊谷武功ノ
 勇士タルニ依テソノ攻ヲマタススミヤカニ大
 手ノ城門ヲ闕テス、ミ出テ勇ヲ震テ拒キタ、
 ヲフ信定親次カ兵利ヲ失テ敗亡ス親次城ヲ
 トマリカヲ盡シテ苦戦スルトイハトモ敗兵是
 ヲ援ケス然ルニ依テ親次于時廿
ハ歳遂ニ戦死ス從

卒十三人一所ニ皆死ヌ于時清康君後ノ山ヨリ
 是ヲ見給ヒテ親次ヲ助ントシキリニ軍士ニ指
 揮シ玉フトイハトモ山岳高ク聳ヘ峻岨自隔テ
 隘路遠ニ依之テ急ニ親次ヲスクフ事ヲ得玉ス
 搦手ノ軍ハ清康君ノ兵大ニ利アリテ城兵ヲ多
 ク討取トイヘ共日既ニ黄昏ニ及フノ間城ヲ援
 ク事ヲ得ヌ清康君兵ヲオサメ兵フ夜ニ入り内
 膳正信定ヲ召テ今日大手ノ軍ニ利ヲ收ヒ親次
 カ戦死スル事信定カ親次ヲ援スニテ敗スル
 ノ故也ト大ニ信定ヲ怒リハツカシメタマフ

享祿四年辛卯

七月小

廿七日信忠君清康君逝去法名安栖院道忠

天文二年癸巳

月

廿日清康君兵ヲ三列岩津ヨリ發シ廣瀬ノ城主

鈴木日向守等トイトミタ、カヒタラフ清康君

ノ兵大ニ利ヲ得テ敵敗トス

天文四年乙未

十二月小

四日清康君尾刈森山ニ陣ニ給ヒ隣郷ノ民屋ニ

放火ニ武威ヲ其邊ニ震ヒ玉フ時ニ三列ヨリ脚

刀来リ告テ云ク松平内膳正信定病ト称シ

嶋ヲ退キテ上野ノ城ニシテ籠リ織田彈正忠秀

信ニ志ヲ通シ逆意ヲ企ルノ由ヲ注進ス森山ノ

城主ハ信定カ塔也又大給ノ源三郎及ヒ小川ノ

水野モトモニ信定カ塔ナリ定シカレラ信定カ

野心ニ組シテ援助アルハシト森山在陣三列ノ

諸士ミナ薄氷ヲフムノ心アリ清康君命アリテ

イハク信定カ智謀兼テ是ヲ知ルソノ武勇恐ル

亦部

ルニタラストアヘテ情ヲ動シ給ハス信定ハ清
 康君ノ叔父タリ是ニヨリテ両家ノ後士等父子
 兄弟相分レテ上野ノ城ト森山ニ陣ス群疑泉ノ
 コトクニ漏テ浮説雲ノコトクニ起ル故カユヘ
 ニ兄弟ノ疑テ弟ハ兄ヲ隔ツルニヨリテ父子
 兄弟ノ中睦シカラスイハンヤ其餘ヲヤ然ルニ
 亦部大藏少輔ハ清康君ニ供奉シテ森山ニアリ
 其子亦部弥七郎ヲ軍所ニマシキテイハク信定
 カ叛逆ニヨリテ我信定トヨシミヲ通ルノ由頻
 々ニソノ聞ヘアリ君恩ヲ忘レテ不義ニ組ニイ

亦部

カテカ野心ヲサシハサマニヤ然トイヘトモ卷
 説我口ニ至テ是ヲ拒ム事ヲ得ヌ此事御紀明有
 于於テハ上覽ニ入レト欲シ証文ヲ書置テ
 イヘト御紀明モナク若御誅罰アルニ於テハ汝
 ハ速ニ此陣ヲ出奔シテ毎ラ山野ニ隠シ時節ヲ
 窺ヒ其証文ヲ献シ我全ク逆意ナキノ旨ヲ死後
 ニ顯スヘシトイサヤイマニ是ハ其意ニ合ル
 五日黎明ニ森山ノ陣ニ馬ハナレテ陣中騒動清
 康君陣營ヲ出給ヒテソノ騒動ヲ制シタマフ時
 ニ亦部弥七郎父ノ大藏少輔ヲ殺害アルカト聞

植村

テ清康君ノ御ウシヨヨリ伺ヒ末乘リテ清康君ヲ
 犯ス即テ逝ス時ニ清康君廿五歳御法名善徳院
 村正年波清甫弥七郎帶スル處ノカ植村新六郎六時二十歳御側ニアリテ弥七郎ヲ
 殺ス諸士集テ周章ス大將遭害ナルノ間陣ヲ森
 山ニ張ルヘキニアラストイヒテ軍ヲ引テ岡崎
 ノ城ニ帰リ来リテ若君ヲ守護シ奉ル清康君遭
 害ノ後内膳正信定岡崎ノ城ヲ窺ヒ謀ルトイハ
 トモ清康君ノ老臣譜代ノ諸士等ヲ夕心ナク若
 君ニ從ヒ日夜ノ警衛ヲコタラス堅ク城ヲ守ル
 ノ間信定己カ武畧ヲ以テ岡崎ノ城ヲ攻トル事

松平

織田

ヲ得ズ依之織田彈正忠信秀ニ援兵ヲ請信秀諾
 シテ八千餘騎ノ兵ヲ卒シ軍ヲ三州ニ發シ進テ
 大樹寺邊ニ屯ス岡崎ノ老臣等城ニキリヒ集リ
 テ軍ノ謀ヲ議シ松平十郎三郎康孝清康君ノ庶弟ヲ部
 將トシテ軍士八百餘騎ヲ二隊ニワケテ伊田ノ
 郷ニ出張ス時ニ伊田ノ郷ハ幡宮ノ鳥居西ノ方
 ニ動キイッル事六尺人奇意ノ思ヒヲナス織田
 彈正忠信秀岡崎ノ軍勢出張スルノ由ヲ聞テ其
 兵八百餘騎陣ヲ分ル事二列トシテ大樹寺ヲ發
 シ伊田郷ニ馳向フ短兵急ニ接リ矢鋒相接ス岡

林植村
高カ

崎ノ兵微勢タリトイハトモカヲ盡シテ奮ヒタ
カフノ間尾刈ノ勢利ヲ失ヒテ敗亡ニ死傷ノ
者多シ岡崎ノ軍士等首ヲ得ル丁五百餘級然リ
トイハトモ岡崎ノ士林春山植村高カ父等戦死
ス尾刈ノ兵ハ多ク討テ又岡崎ノ兵ヲ微勢ニシ
テ互ニ戦ヒ屈ス依テ和睦ヲムスヒ兩陣兵ヲ才
サメテ退去ス
天文五年
三月六日
十七日老臣等群議シテ若君勢刈ヲ御出舟遠刈

欠塚ニ至リテ御着岸アリ
廿二日若君遠刈欠塚ヨリ駿府ニ渡御有今川義
元悦テ謁見ス時ニ若君ノ老臣等酒井石川等岡
崎ノ城ヨリ御還仕ノテ義元ニ議ス義元許諾
ス是ヨリ先吉良東條持廣ヒソカニ此事ヲ義元
ニ談シ義元是ヲ約スルニ依テナリ
伯母若君ノ此春若君于時十歳御首取アリテ二郎
三郎廣忠十号ニ給フ加冠ハ吉良持廣廣忠君
天文四年十二月六日三刈ヲ去テ勢刈ニ走リ同
五年ノ春駿刈ニ至リ其年十月又三刈牟呂ノ城

勢省

大久保
林
成瀬

二移リテ同六年五月朔日岡崎ノ城ニ歸リ給フ
時ニ廣忠
君十二歳

十月六

廿三日廣忠君岡崎ノ城御本居ノ事累世ノ諸臣

等是ヲ相議シテ忠義ヲ盡ス殊ニ八國大久保大

原林成瀬等ノ幼拔群タルニ依テ廣忠君各五人

ニ是ヲ賞シテ食祿ヲ加賜セラル

今度八國之儀忠節無比類候然者以田地方

十貫文宛可有加増者也猶古代不可相違

候依如件

候依如件

天文六

十月廿三日

八國其六殿

大久保利八殿

成瀬又六殿

大原元近右衛門殿

林 藤助殿

此後大原元近右衛門才ヨヒ今村傳次郎故アリ

于廣忠君ヲ背キテ織田信秀ニ属ス

内務省

松平

酒石

水野

天文七年戊戌

十一月大

廿七日松平内膳正信定卒去ス

天文十年辛丑

廣忠君ノ老臣酒井雅樂頭正親石川安藝守清兼

石川伯耆守教正安部大藏少輔等廣忠君ノ嫁娶

ヲ計ルニ三刈苧屋ノ城主水野石衛門太夫忠政

カ如ヨロシカル人キノ旨ヲ相議シテ是ヲカシ

テ婚禮ヲ成ヌ三刈ノ諸士岡崎ノ城ニ参賀ス

天文十一年

十二月小

廿六日三刈岡崎ノ城ニ於テ

竹千代君御誕生

是大神君ナリ

水野石衛門太夫

忠政ノ如時ニ酒井雅樂頭正親御胞刀ヲ役ニ石

川安藝守清兼御産屋幕目ノ役ヲ勤ム

天文十二年癸卯

七月

十二日水野石衛門太夫忠政大神君御辛去

天文十三年甲辰

八月小

水野

止一日長親廣忠君曾祖父逝去法名掉舟院一閑道
 野云水野石衛門太夫忠政卒去ノ後其子水野下
 野信元父ノ遺跡ヲ継テ葺屋小川西城ヲ兼守
 リテ織田信秀ニ好心ヲ通シ今川義元ニ告ク廣
 忠君ハ元ヨリ今川家ノ助成ヲ受タマフノ間義
 元ニ交リ親深シ故ニ廣忠君水野信元ト申絶シ
 タマフ廣忠君ノ室家ハ信元カ妹也是ニヨリテ
 廣忠君止事ヲ得玉ハス御内室ヲ離別シ給フ其
 比御内室甚痛リ給事有酒井雅樂頭正親其モタ
 シ難キ事ヲナケキテ正親カ宅ニ招請シ奉リテ

酒井

水野

御快氣ノ日數ヲ經ル其後廣忠君三州田原ノ城
 主戸田彈正少弼カ女ヲ娶
 九月六日
 廣忠君ノ御内室正親カ宅ニシテ御イタワリ御
 快然タルニヨリテ遂ニ水野信元カ居城葺屋ノ
 城ニ送ラシメ給フ時ニ竹千代君大神君也三歳岡崎
 ノ城ニ止リ玉フ母公名残ヲ惜ミテ御悲歎淺カ
 ラス浅羽金田等其外二十餘騎オシテ御内室ヲ
 饋ラシメタマフ葺屋ノ近邊十八町トイフ處ニ
 至ル時ニ御送リノ士イッテ曰汝等爰ヨリ吾ヲ

水野

捨テ岡崎ノ城ニ歸リ去ヘシ淺利金田是ヲ聞ス
御内室ノイワク汝等知ラスヤ下野守信元ハ普
通ニシテマクレテ短氣勇猛ノ人ナリ岡崎ノ士
吾ヨ饋リ来ルト聞ハ是ヲ憤リテ兵ヲ發シ送り
ノ士ヲ殺スヘシ汝等タトヒ勇ニシテ是ヲ防ク
トイフトモ微勢ニシテ敵地ニ入り多勢ニ圍レ
遂ニ軍ニ利ヲ失ヒテ戦死スヘシ吾今廣忠君ニ
別レタテマツルトイヘトモ竹千代君ヲ残シ置
ノ上ハ岡崎ノ士ヲ思フ事ウトカラス終リヲ慎
ミ遠クハカルニ竹千代君成長ノ後下野守信元

トハ伯父甥ノヨシミタルノ間遂ニ八年アリテ
交親スヘシ然ルニ信元今汝等ヲ殺サハソノ遺
眼アリテ後交和ノサマタケト成ヘキ旨言ヲ以
クシ給フ淺利金田等義リテ以後竹千代君ノ御
事タルニ於テハ是非ヲ論スヘカラストイ、テ
芍屋領内ノ郷民等ヲモトメ出シ衆興ヲ昇セ是
ハ芍屋ノ城主水野下野守信元御妹ナルノ故百
テ今芍屋ノ城ニ渡御アルナリ汝等聊モオロソ
カニシ奉ラス芍屋ニ御興ヲ昇入レタマツレ
トイ、テ暇ヲ告テ歸リサラントス御行スヘ猶

阿蘇省

久松

覺束ナキニヨリテ行程五六町ヲサリテ遙ニ見
 送り奉ルノ處ニ御思慮ニ遣ワス信元此由ヲ聞
 テ甲士數百騎ヲ發シ送りノ士ヲ討トノント競
 來ルトイハトモ淺羽金田速カニ返クノ間信元
 カ兵士等御内室ノ御輿ヲ守護シ苧屋ノ城ニ帰
 リ入ル誠ニ天下ノ主トナラセ給フ
 大神君ノ御母公タルニヨリテ女姓タリトイハ
 トモ御思慮ノカシコク是ヲ明察シテ謀リタマ
 フ其後尾州知多郡阿古屋ノ郷主久松仇渡守俊
 勝ニ嫁シタマヒテ三男四女ヲ誕生アリ是ミナ

細注勝ノ上三
字久平

松平

大神君御同胞ノ御連枝タリ後ニソノ庶弟三人
 ニ各松平ノ姓ヲ賜ル嫡男三郎太郎後因幡守勝
 次男源三郎後豊前守三男長福後三郎四郎ト号
 ト改長女松平伊豆守次女松平丹波守三女松平
 頭家清四女早世水野下野守信元カ妹廣忠君ノ
 御内室離アリテ信元中絶ニ給フノ間紀伊守
 公止事ヲ得スニテ妻カヲ苧谷ノ城ニ送り婦ス
 信元怒テ送りノ士ヲ殺ス
 天文十五年丙午

明
勝
信

三月

岩津太郎親長長親君卒ス後嗣ナキニヨリテ藏
入信孝ソノ遺跡ヲ領ス廣忠君岡崎ノ城御本居
ノ年信孝ハカリテ大功ヲ盡スニヨリテ此程ノ
恩賜ノ地ハ宛行ワレテモ苦シカラサルノ由廣
忠君是ヲユルニタマフニヨリテイヤ老臣
ノ面々是ヲ答ムル事其後幾ハクナラスシテ信
孝ノ庶弟松平十郎三郎康高卒去ス康高嗣子ナ
キノ間信孝又テノ遺跡ヲ押領ス是ニヨリテ岡
崎ノ老臣等群議シテ云ク信孝本領ニ親長及

康高ノ旧領ヲカフレハ既ニ以テ岡崎ノ城領ニ
才ヨフ清康君御幼君ノ時松平内膳正廣大ノ地
ヲ領シ君崩ラ奪フ故ニ忽ニ仇トナリ又今亦信
孝多ク領知ニテソノ威増長セハ必ス後ノ仇ト
ナリテ如何ナル野心ヲカサシハサミ又ラント
老臣等オノオノ眉ヲヒソメテ怪ミ疑フ安部大
藏少輔ハ其子弥七郎清康君ヲ弑シ奉ル不忠ノ
者ノ父ヲメシテ擧用シ給ヒ忠義ノ臣トヒトシ
ク権ヲトラシメ玉フ事ヲ日比信孝是ヲ憎ムノ
間大藏少輔ト信孝常ニ不快ニシテ隙アリ是ニ

内務省

ヨリテ大藏少輔トシテ時ヲ得テ信孝久地押領ス
ルソノ咎ヲ許ヘコノ罪ヲ以テ信孝ヲ追放セラ
レシ事ヲハカル奉職ニテ其後其子孫ニ傳
天文十六年丁未ノ秋信孝ノ孫トシテ
廣忠君御不例ニ依テ今川義元ニ新正ノ賀儀ヲ
告給フニカ為ニ御名代トシテ松平藏人信孝ヲ
シテ駿河ニオモムカシタマフ其際ヲ窺ヒテ謀
テ信孝カ館ニ相殘ル妻子從者等ヲ追放ニ所帯
ヲ没収セラレ軍士オシテ彼ノ館ヲ堅ク守シム

是親長康高ノ遺跡ヲ押領スルノ罪ニヨリテナ
リ信孝不日ニ駿河ヨリ岡崎ニ歸リ來ルトイヘ
共宅地ニ入ル事ヲ得マ信孝怒テ我廣忠君ニ殺
群ノ忠功ヲ盡ス何ニ依テカ廣忠君ノ御勤氣ヲ
蒙ランヤ今案スルニ安部大藏少輔カ不忠ノ罪
科ヲユルサレ剝ハ恣ニ權ヲトル事モ吾常ニ忍
ムノ間彼亦我ヲ讒スルナルヘシト察シテ近習
ノ士ニヨリテ信孝ニ於テ不儀ナシ讒臣ノ實否
御弘明アルヘキノ旨陳詞ヲ盡ストイヘ共廣忠
君敢テ免シタマフソノ間信孝亦駿河ニ走リテ

松平

明
勅
省

今川義元ニヨリテ廣忠君ノ赦免ヲ請フ義元是
ヲ諾シテ廣忠君ノ臣酒井雅樂頭石川安藝守植
村新六郎安部大藏少輔等ヲ駿府ニ招キテ信孝
カ免許ノ事ヲ相議スルトイヘトモ老臣各信孝
カ奢侈ヲ憎ムノ間此旨ニ應_ズ信孝詮方ナク
遂ニ松平三右衛門ニ與シテ織田信秀ニ屬シ廣
忠君ヲ背ク岡ノ城ニ楯籠ル松平三右衛門尉織
田信秀ニ與シテ好ヲ通シ參列上和田ノ若ヲ守リ
テ岡崎ノ城ヲ伺フ同國三木岡兩城ハ松平藏人
信孝上野ノ城ニ酒井將監是ヲ守リテ各織田信

酒井

松平鳥居

秀ニ屬シ岡崎ノ城ヲ謀ル
十六日酒井與田郎家次卒ス
廿八日廣忠君軍ヲ渡河内ニ發シテ藏人信孝カ
兵ト々カハシメ給フ廣忠君ノ兵松平外記忠
次_{于時廿七歳}松平喜藏_{弥石衛門カ兄}鳥居源七郎_{彦石衛門カ兄}等
奮戰シテ死ス_{渡河内ノ守將鳥居又次郎忠次ヲ}
討テ其首ヲ得タリ_{忠次カ帶スル處ノ刀青江ハ}
居_{ハ外記カ後弟タル依テ忠次カ刀鳥居源七}
郎_{ハ松平弥九郎景忠カ嫡子ニ送リ遣ス}鳥居源七
郎_{ハ松平清兵衛尉是ヲ討捕ル}
_{記忠次カ譜代}

鳥居源七郎

高名ヲ遂ル其翌年松平蔵人信孝ニ属シテ此合戦ニ鳥居ヲ討テ
 此年織田三郎信長時ニ織田彈正正忠信秀カ男ス織田正忠後ニ上総今ト号
 始テ兵ヲ卒テ三州吉良大濱ニ發向ニ邑里ニ放
 火ニテ尾州ニ帰ル
 松平三左衛門尉不慮ニ遭害スルノ後織田信秀
 暫時謀ヲ矢フトイヘトモ又上和田ノ若ニ尾州
 ノ援兵ヲ箠置近邊若ヲ築ク事六ヶ所ニシテ是
 ラ守ラシム三州ノ諸士信秀ニ忠ヲ通スルノ間
 國中岡崎一城ニセマリテ四面ニ敵ヲ詰ル是ニ

依テ廣忠君使テ駿州ニ馳テ今川義元ニ援兵ヲ
 請ヒ玉フ義元是ヲ諾シテ駿遠兩國ノ兵ヲ催シ
 三州ニ發向セント欲ス時ニ義元質ヲ廣忠君ニ
 請フ廣忠君止事ヲ得玉ハス後子竹千代君大神君六
 也郎尉ヲ駿州ニ趣カシメタマフ竹千代君岡崎ヲ
 御首途アリテ駿州ニ趣キ給フ金田ノ何某供奉
 ス戸田六郎田原途中ニムカヘ三州塩見坂ニ
 シテ竹千代君ヲ奪ヒ取奉ル時ニ金田是ヲ拒テ
 戦死ス戸田五郎竹千代君ヲ供奉シ尾州ニ往テ
 三州ヲ謀ランニハ是ニ能質ナリトイテ織田

明教

信秀ニ授ク信秀大ニ悦ヒテ竹千代君ヲ契田ノ
 住人加藤圖書ニ渡御ナシ奉ル信秀厚ク賞シテ
 戸田ヲ三刈ニ帰ス信秀使ヲ三刈ニ遣シテ云ラ
 イハク岡崎ヨリ駿府ニ趣カシメ給フノ實竹千
 代君ヲ奪ヒ取テ尾刈ニアリ廣忠君今川ヲ背テ
 吾ニ和^セハ實ヲ岡崎ノ城ニ帰シ入ルヘシ此儀
 同意ナキニ於テハ實ヲ殺害シ猶三刈ヲ犯シ攻
 ムヘキノ由ヲ達ス廣忠君ノイハク我實ヲシテ
 駿刈ニ趣カシマルノ處ニ戸田途中ニシテ不慮
 ニ是ヲ奪ヒ取テ尾刈ニ送り遣スノ由タトヒ爰

子ヲ忽ニ殺害セララルトイフ共今川ト一味ノ
 約ヲ堅クス今^以テソノ約ヲ変シ義元ト交ヲ絶
 テ織田ニ志ヲ通セニ事是武田ノ道ニアラサル
 ノ由御返答ニ及フ信秀聞テ義ヲ守リテ約ヲ変
 セス其後ニ弱レ給ハサル事ヲ大ニ感歎シテ是
 ヨリシテ竹千代君ヲイタワリ懇懇ニス竹千代
 君熱田寓居ノ間同國阿古居ヨリ一日ノ往来タ
 リ竹千代君ノ母公久松佐渡守俊勝ニ嫁シタマ
 ヒテ阿古居ニ住シ給フ是ニヨリテ平野久兵衛
 竹内久六ヲシテ熱田ニ遣ハシ常ニ竹千代君ノ

阿古居

寒暑ヲ問ヒタマヒ衣類菓肴等竹千代君へ送り

給フ其後竹千代君駿府ニ寓居ノ時モ母公ヨリ此兩使ヲシテ音信ノ御使トニタマフ

天文十七年戊申

三月小

十九日織田信秀岡崎ノ城ヲ陥シイレント欲テ

兵ヲ三列ニ發シ安祥ノ城ニ至ル豫メ駿列ニ其

聞ハアリ是ニヨリテ今川義元廣忠君ニ援兵ト

シテ雪齋和尚根列臨濟寺ノ住持ヲ首將トシテ兩朝比奈

岡部五郎兵衛等ヲ相シタカヘ軍士數千騎ヲ發

シテ藤川ノ驛ニ屯ス

竹千代君天文十六年ヨリ同十八年ニ至リテ熱

田ニ寓居アリテ此春三列岡崎ノ城ニ歸リ入ラ

セタマフ廣忠君御喜悅不淺三列ノ諸士各岡崎

ノ城ニ登リテ是ヲ賀シ奉ル廣忠君先年ノ約ヲ

變シ給ヒ難キニヨリテ竹千代君ヲ質トシテ再

ヒ駿列ニ趣カセタマフ酒井雅樂頭天野三郎兵

衛尉平岩七之助同善十郎渥美太郎兵衛尉阿部

善九郎阿部新四郎等七人ノ外内藤與惣兵衛御中

間供奉ス今川義元大ニ歡テ竹千代君ニ謁見シ

駿府五ヶ嶋ニ御館ヲ新ニ作りテ是ニ移シ奉リ

織田

テ久島土佐守ヲシテ竹千代君ニ附置懇懇ニス
 其比今川ノ後士孕石主水正竹千代君ニ教廻無
 禮ヲナス亦大河内ノ某及ヒ岡崎次郎左衛門尉
 正綱宮ヶ崎ノ御館ニ参候シテ常ニ寒温ヲ問ヒ
 奉リテ深志ノ功ヲ盡ス
年アリテ遠州高天神ノ
 主水正此城ニアリシヲ主捕シノクマヒテ駭存
 寓居アリシ時ノ昔ノ仇ヲ以テ是ヲ斬罪ニ結フ
 大河内ノ何某モ高天神ニ籠城ス其旧功ヲ報セラ
 レ一命ヲ助ケテ是ヲ賞シ給フ

三月大

三日織田備後守信秀初ノ名卒去ス四十二歳其
 子信長時二十歳家督ヲ継テミツカラ称シテ織田

酒井

松平

上総ハト號ス

六日廣忠君逝去春秋廿四歳御法名瑞泉院應政道軒
大神君ノ御執奏ニヨリテ慶長十二年大納言ヲ贈ラル

天文二十年辛亥

十月大

廿日酒井與四郎清秀卒ス

弘治二年丙辰

正月大

二月小

廿日松平右京亮義春元ノ名甚太郎長親君ノ四男東條ヲ以テ家号トス

内務省

三州日近ノ城ヲ攻ム城主貞平久兵衛出テ戦フ

義春戦死ス嗣子家忠幼年ナリ家臣松井九近將

監忠次後松平周防守景親ト号ス武功ノ勇士ニシテ家忠カ

縁者タルニヨリテ松井ヲ傳トシテ東條ノ兵ヲ

擁セシム

此年大神君駿刈ヨリ三州岡崎ノ城ニ還リ給

フ

弘治三年丁巳

五月六日

十五日大神君御首服アリテ藏人元康是ヨリサキニ郎三

信郎元義元カ媒トシテ今川家ノ縁者関口刑部少

輔刑部少輔カ室ハカ女ヲ以テ大神君ニ嫁セ

シメ婚礼ナル大神君譜代ノ諸士等駿刈ニ参

賀シテ嫁娶ヲナシ奉ル時ニ三州ノ士柳原何カ

シノ馬嵐鹿毛ト号ス大神君ニ献スは無雙ノ良馬

ルニヨリテ大神君此馬ヲ公方義輝光源院殿ニ献

セラル義輝是ヲ悦テ大神君ニ自筆ノ書翰及

ヒ短刀ヲ授與ス

二月六日

尾州ノ士三谷カ一今川義元ニ志ヲ通シ知田郡

ノ弱兵等ハ過半豫參ノ降人トナリテ義元ニ屬
ニテ城々ヲ避渡マノ間品野ノ城ハ三州ノ士松
平勘四郎信一後伊豆守笠寺ノ城ハ今川ノ兵葛
山備中守及ヒ三浦元馬助飯尾豊前守浅井小四
郎等ヲシテ是ヲ守ラシム
九月小
五日主上崩御
十月大
廿七日方仁親王正親町院踐祚

家忠日記増補卷之二

永祿元年戊午

二月小

五日三州寺部ノ城主鈴木日向守今川義元ヲ背
シ義元大神君ト議ニテ是ヲ討ント欲ス大
神君時ニ十兵ヲ寺部ニ飭シ給フ大神君軍ヲ
出シ給フノ始ナリ是ニ依テ三州ノ諸士勇ニ進
ミテ是ヲ攻打松平次郎元衛門尉重吉軍功ヲ盡
ス重吉力次男般若之助從士名倉之某等奮戰シ
テ死ス大神君ノ兵大ニ利ヲ得テ敵ヲ討捕

松平

家忠日記

三ノ給フ事百餘人火ヲ郭外ニ放テ武蔵ヲ震テ
 兵ヲオサメ玉フ義元是ヲ感銘シテ太刀一腰ヲ
 大神君ニ賜フ
 永祿二年己未
 三月小
 此月駿州ニ放テ大神君ノ長子信三郎誕生有世
 堂ハ関口刑部太輔カ女是ニ依テ駿州ヨリ三列
 岡崎ノ城ニ帰り給フ
 永祿三年
 五月大

松平

十八日大神君智多郡阿古屋ノ郷久松佐渡守
 俊勝カ亭ニ渡御シ給ヒテ世公及ヒ継父佐渡守
 俊勝ニ初テ御對顔アリ御同胞ノ庶弟三郎太郎
 源三郎長福各三人世公ノ傍ニ有 大神君是ヲ
 愛シ給ヒテ曰我兄弟彼等ヲシテ我姓ヲ後授與セ
 シメ三列平均ノ後是ヲ招テ創業ノ資トスヘキ
 ノ旨鈞命ヲ蒙ル時ニ俊勝長刀并ニ螺貝ヲ以テ
 大神君ニ獻ス 大神君平野久藏竹内久六郎ヲ
 名シテソノムカニ熱田ニ寓居ノ時寒温ヲ問ヒ
 奉ル其日勞ヲ報セラレ彼兩士ヲ賞シ玉フ鵜殿

鵜殿

長助大高ノ城ヲ守リテ勞スルノ間 大神君是
 ニ代リテ大高ノ城ニ移リ給フ
 十九日黎明義元カ軍勢鷺津ノ城ヲ圍テ ~~攻~~ 擊城
 將飯尾遠江守織田玄蕃允暫時拒キテ戰フトイ
 ヘトモ駿州ノ猛勢キソヒ攻ルノ間城遂ニ陥ル
 義今朝ノ軍ニ鷺津ノ丸根ノ兩城ヲオトシイレ
 武勇ヲ震ヒ進テ鳴海桶狭間ニ至ル近邊ノ地下
 人等酒肴ヲサケテ勝軍ヲ賀ス義元諸卒ヲ指
 テ盃ヲ賜リ今朝兩城ノ戰功ヲ美シテ酒宴ニ及
 フ時ニ信長三千餘騎ヲ率ニテ清洲ノ城ヲ發シ

笠寺ノ東ノ道ヲ經テ善照寺ノ邊ヨリ兵ヲ二隊
 ニワケテ篠ヲ卷テ列テ潛ニシ義元カ陣スル後ノ
 山ヲ廻リテ是ヲ伺フ時ニ黒雲類ニムラクテ霧
 海ヲ湛テ闇夜ノ如シ是ニ依テ義元敵ノ近ク進
 ミ來ル事ヲミラス信長篠ヲサシアケ突ヲ發テ
 急ニ攻撃義元カ軍勢狼狽ニテ敵救ス義元惟唯
 ノ内ニ坐シテ退カス敗軍ノ士ヲ指揮シテ戰シ
 ノント欲ス時ニ信長ノ從士服部小平太進ミ來
 テ鎧ヲ以テ義元ヲ突ク義元太刀ヲ採テ其柄ヲ
 功リ折服部カ膝ニ疵ヲ負スル危利新助服部ヲ

新助服部

取々来り遂ニ義元ヲ撃テ其首ヲ得タリ大將命
 ヲ落スノ間駿州ノ兵猶敗亡ス信長勝ニ乗テ是
 ヲ追討事凡二千五百餘人駿州ノ精兵三浦元馬
 又齋藤掃部助菴原元迫太夫同姓莊三郎朝夷主
 計頭西郷内藏助富塚修理亮松平撰津守富永伯
 耆守四宮右衛門八井伊信濃守松平兵部少輔油
 井藏人松平沼右衛門尉等皆死ス信長ノ後士佐
 々隼人正千秋新四郎岩室長門守織田元馬又百
 五等多ク戦死ス
 廿日大神君三列大樹寺ニ陣ニ結フ

永祿五年壬戌

三月小

井伊

遠列伊ノ谷ノ城主井伊肥後守直親叛逆實否
 明ナキノ以前ニ朝比奈備中守カ為ニ戦死スル
 人間領地ヲ没収セラル直親カ子万千代時後ニ
 兵部少氏真是ヲ殺サントス新野元馬助カレカ
 赦免ヲ請フ氏真是ヲ下ルス新野大ニ歡テ万千
 代ヲ養育ス此年新野カ引間ノ城ヲ攻テ戦死ス其
 万千代ヲ殺サントス道ル直親出言ノ後カノ妻松
 源七郎ニ嫁ス故ニ盤居ス代
 密ニ松平下カ家ニ盤居ス代

内務省

松平備後守清善カ娘ニ質トシテ吉田ノ城ニ在
リ清善ハ大神君累世ノ士タルニヨツテ質ヲ
敵城ニ棄テ岡崎ノ城ニ至リ大神君ニ忠ヲ盡
ス吉田ノ城主小原肥前守三州ノ諸士ト懲サ
カ為ニ清善カ娘ヲ初メ大竹兵右衛門茂利三太
夫等カ子其外質ヲ棄テ大神君ニ忠ヲ盡ス輩
ノ妻子十一人ヲ捕テ吉田ノ城下龍念寺寺ニ於
テ各是ヲ串刺ニス

永祿六年癸亥

大神君織田信長ノ女ヲ以テ三郎信景^康ニ嫁セシ

菅沼

九月小ノ所
藤沼藤十郎大神君ノ命ヲ奉リテ三州仇々木
ノ邊ニ若ヲ攝フ兵糧不足ニヨリテ仇々木ノ郷
上宮寺野寺ノ本證寺針崎ノ勝万寺仇々木ノ上
宮寺是ヲ三州一向宗門ノ三ヶ寺トイフ
ニ兵ヲ發シテ兵糧ヲ奪ヒ取テ菅沼カ溝フル要
害ニ運ヒ入ル上宮寺ノ僧大キニ怒リテ國中宗
門ノ僧ヲ招キ集メ上宮寺ニ會合シ評議シテイ
ハク當國三ヶ寺ハ閑山ヨリ以來守護不入ノ地
ナリ然ルニ今兵ヲ寺中ニ發シテ糧ヲ奪ヒ取ノ

野
務
箱

餘狼籍其法ヲ破ル後世ノ提制セスニハ有ヘカ
ラマトイニテ三ヶ寺ノ惡僧甲曹ヲ帶シ兵器ヲ
携ヘ菅沼カ館ニ不意ニ發ス菅沼カ家人等少々
出合ヒハラ拒カンテ欲ス惡僧ノ大勢競フテ亂
入ニ遂ニ兵糧ヲ奪ヒ返シテ上宮寺ニ歸ル菅沼
大ニ憤リテ是ヲ酒井雅樂助等ニ訴ル即正親
大神君ノ召赫ニ達ス大神君怒リタマヒテ
正親ニ命ニテ寺中狼籍ノ惡僧等ヲ紀明アリテ
ソノ張本人ヲ斬罪セラル是ニ依テ國中ノ一向
宗門ノ僧及ヒ且新是ヲ憤リテ一揆ヲ企テ今川

氏真ニ志ヲ通スルノ士三列ノ所々ニ有彼等ヲ
催フニ兵ヲ揚シテ欲ス大神君累世ノ士モ此
宗門ノ輩ハ是ニ組ニテ大神君ノ命ニ背クモ
ノ多シ吉良義昭先年逆意ヲ企テ大神君ト兵
ヲ結フトイハ共軍ニ利ヲ失フノ間降ヲ乞フ大
神君是ヲ許シ給フニ又今度一揆ノ逆徒等ニ進
ムラレ志ヲ變シテ東條ノ城ニ惡シテ大神君
ニ背ク荒川甲斐守先年義昭カ逆意ノ時組セヌ
大神君ニ志ヲ通シテ軍忠ヲ盡ス其功ニヨリテ
大神君ノ御妹ヲシテ荒川ニ嫁セシメタマフ故

松平 酒井 松平

二三列ノ諸士荒川ヲ攀用ス今度義昭是ヲハカ
ルニヨリテ異心發リテ一揆ニ組ニ大神君ニ
背ク松平監物家次荒川ニ志ヲ通ニ櫻井ヲ以テ
背ク酒井監物上野ヲ以テソムク松平七郎大草
ヲ以テ叛ク賊徒組ニ約ヲ結ニテ逆威ヲ震フ
大神君石川日向守家成ニ命ニテ上野ノ城ヲ攻
撃ニメタマフ今度一揆ノ惡徒ニ組ニテ野寺及
ト佐々木ノ寺内ニ馳集ルノ輩大塚甚左衛門大
塚八兵衛大塚又内大塚善兵衛五郎三右衛門尉
中川太郎左衛門尉牧野吉藏倉地平右衛門小谷

甚左衛門尉太田善太夫安藤金助山田八藏安藤
太郎左衛門尉太田弥太夫太田彦六郎安藤治石
衛門尉鳥居又左衛門尉加藤無手右衛門尉矢田
作十郎戸田三郎右衛門尉也土呂ノ寺内ニ壁ス
此等ノ十人カラ大橋徳十郎佐橋甚兵衛尉同甚
五郎石川半十郎石川善五左衛門尉同姓十右衛
門同姓源左衛門尉同姓新九郎同姓大八郎同姓
右衛門八同姓又十郎大見藤六郎佐橋乱之助大
橋元馬之助江原孫三郎本多甚十郎佐野與八郎
江原又助山本小次郎松平半助小野新平村井源

内務省

四郎山本才藏黑柳次郎兵衛尉成瀬新藏岩堀半
 七郎本多九郎兵衛三浦平次郎加藤五右衛門尉
 平井甚五郎黒柳彦助野澤四郎次郎等也針寄ノ
 勝万寺ニ楯籠ル輩ニハ蜂屋半之丞寛永太夫渡
 邊玄蕃九郎同姓八郎石衛門尉同姓八郎三郎同姓
 八郎五郎同姓源藏同姓小吉同姓五郎作浪功孫
 七郎近藤新次郎黒柳孫九郎衛門尉同姓金十郎本
 多喜藏加藤次郎九郎衛門尉同姓傳十郎同姓傳藏
 同姓又三郎淺岡新十郎同姓新八郎安藤次郎九
 衛門尉佐野小太夫加藤源太郎大塚七藏成瀬新

一揆方

兵衛尉坂部又六郎同姓莊之助同姓相之助同姓
 造酒之丞同姓又兵衛尉等也上野ノ城ニハ酒井
 將監ヲ首將トシテ足立石馬助同姓孫十郎鳥居
 四郎九郎衛門尉同姓金五郎高木九郎芝山小兵衛
 尉本多弥八郎柳原七郎右衛門尉大原九郎近石衛
 門尉近藤傳次郎酒井作石衛門等也大神君ノ
 麾下ニ属シテ軍忠ヲ励マス輩酒井雅集之助正
 親西尾ノ城ヲ守リテ野寺荒川ト屢戦フ松平主
 殿助伊忠深搦ノ城ニアリテ土呂針寄ト挑ミ戦
 ノ本多豊後守ハ土居ノ城ヲ守リ松平備後守清

神君方

内務省
 蔵書

宗八竹谷ノ城ニ百松平紀伊守家忠取ノ原ノ城
ヲ守ル松平勘四郎信一ハ藤井ノ城松平三郎次
郎親俊ハ福録ニアリテオノオノ一揆ノ兵ト日
夜ニイトミ戦テ軍忠ヲツクスソノ録石川日向
守家成同姓伯耆守教正内藤三左衛門尉同喜一
郎同姓平左衛門尉同姓十内鷓殿十郎三郎松平
弥右衛門尉松平孫九郎松平次郎右衛門尉松平
金助鳥居伊賀守加藤比称之丞加藤九郎次郎同
源太郎米津藤藏同小太夫小栗大六郎同仁右衛
門尉上野三郎四郎栗生長藏中根喜藏同九藏同

権七郎同源六郎同甚六郎同新右衛門尉同弥四
郎同喜三郎同甚七郎成瀬藤藏榊原撰津守同隼
之助同小右衛尉山田清太夫伊奈^市郎右衛門尉
香村半七天野三郎左衛門尉同三郎兵衛尉同甚
四郎同助兵衛同姓傳右衛門尉同又次郎山田平
十郎渥美太郎兵衛尉加藤播磨守平岩七之助青
山善太夫同牛之助同善四郎今村彦兵衛尉永見
新右衛門尉近藤馬左衛門尉久米新四郎八國甚
四郎酒井下總守細井喜三郎大竹源太郎小栗助
兵衛尉同弥右衛門尉安藤九助池浪之助同水之助

内
終
省

吉原助兵衛尉遠山平太夫鳥居鶴之助同才一郎
筒與石衛門尉寛圖書寛斗之助大屋甚助同甚七
郎林藤七郎内藤甚五左衛門尉同四郎左衛門尉
松平山城守秋浦藤次郎山田喜八郎等谷岡崎ノ
城ニ馳集リテ大神君ニ軍忠ヲ盡サント欲ス
水野藤十郎後惣兵衛ト号兄ノ下野守信元ト不
快タルニヨリテ小河ノ城ヲ避~~テ~~三刈鷲塚ニ整
居ス又水野太郎作村裁又四郎等モ鷲塚ニアリ
忠重一揆蜂起スルト聞テ此兩軍ヲ携ヘ岡崎ノ
城ニ来リテ大神君ノ先驅ニ加リシハ三ハ戰

内務省
藏書

テ軍功ヲ盡ス
此秋大神君先康ヲ改テ家康ト名付給フ
永祿七年甲子

正月小
二月

大神君命アリテ曰最三ヶ寺ハ一揆ノ本人タル
トハイヘトモ沙門ノ儀タル間死罪ヲ免許アラ
ン故是ニ與スル諸士ニ於テハ一人モ残ラス各
御誅伐アルヘキノ旨也時ニ老臣等強ク諫メ奉
ルニヨリテ大神君遂ニ是ヲ許シ給フ故ニ上

内務省
藏書

和田ノ郷浄聚院ニシテ自今以後一向ノ宗門ヲ
捨テ幕下ニ属シ忠信ヲ盡クヌノ旨オノオノ記
證文ヲ書シメタマヒ三ヶ寺揃置ル處ノ諸士ニ
テ免許ヲ蒙ル旨石川日向寺家成土呂式至リテ
教命ヲ告ル賊徒家来カ言ヲ聞テ戈ヲ投テ服ス
五月六
十三日今川氏真々臣小原肥前守三州吉田ノ城
ニ有テ國中ノ質ヲ捕置テ城ニ籠置三州ヲ畧セ
ニト伺然トイヌトモ三州ノ諸士小原ニ従ハス
オノオノ大神君ノ麾下ニ属シ忠義ヲ盡サン

ト欲スニ是木ノ城ノ戸田主殿助モ大神君ノ
幕下ニ属シテ策忠ヲ勵サント欲スルトイヘト
モ質トシテ其母吉田ノ城^{ニ有}ハ是ニヨリテ戸田
志ヲ顯ハシテ大神君ニ忠義ヲ盡ス事ヲ得ス
戸田是ヲ謀リテ吉田ノ城ニ行テ小原ト交リテ
厚クシ常ニ雙六ヲ弄テ興ヲ催シ老母ヲ奪ヒ返
サニ事ヲ計ルアル時戸田吉田ノ城ニ分リテ例
ノコトク小原ト雙六ヲ興ス戸田カ家人ニ野々
山ノ何某トイフモノ有酒肴ヲ長櫃ニ入テ下人
二人ニ舁セ吉田ノ城門ニ至リ櫃ノ蓋ヲ開ヒテ

内務省

内務省

ソノ中ヲ警衛ノ士ニ見レシメテイハク戸田小
原ヲ慰テ酒宴催フスコノ次ヲモツテ母ノ汚衣
ヲ改メ易ント欲ス此櫃ヲ城外ニ返サントキ彼
汚衣オシテ櫃ニ入シメ歸リサラン疑テナカ
レト野々山懸懸ニコト葉ヲ盡シ勤番ノ士是ヲ
聞テ戸田カ從者常ニ城中ニ往來スルニヨリテ
怪ムトナク是ヲ諾ス戸田ハ小原ト雙六ヲ弄テ
酒ヲ進ムソノ間ニ野々山戸田カ老母ヲ長櫃ニ
入テ城門ヲ出ル警衛ノ士敢テ答メス戸田カ軍
勢途中ニカハ是ヲ警固シテニ連木ノ城ニ歸

内務省

リハル戸田暇ヲ告テ城門ヲ出城下ノ町ニ放火
シテニ連木ノ城ニ馳歸ル兼テ其約ヲ定メ給フ
テヨリテ大神君御油ノ驛ニ御陳生有放火ノ
烟ヲ見給ヒテ兵ヲ下北村ニ發シ玉フ大神君
戸田ニ主殿助カ智謀忠孝ヲ御感アリテ旧領ハ
百貫并糸地二千貫ヲ加賜セラレ大神君吉田
久城邊喜見寺ニ若ヲ築テ松平主殿助伊忠鶴殿
ハ郎三郎ヲシテ守ラシメ給フ又糟塚ニ要害ヲ
オサメ小笠原新九郎オシテ是ニ居ラシム一ノ
宮ノ若ニハ本多百助是ヲ守ル戸田主殿助ニ連

小笠原

戸田

内務省

内務省

松平 本多 蜂屋 松平

本ノ城ニアリテシハシハ兵ヲ吉田ノ城ニ發シ
テ小原ト苦戦ニ遂ニ戦死ス大神君軍ヲ發シ
テ野田牛窪ノ城ヲ攻撃シメタマフ御味方ノ兵
大キニ勝テ敵死亡ス大神君師ヲ帥テ吉田ノ
城ヲ攻主ヲ城主小原ノ肥前守城外ニ出張シテ
是ヲ拒ク松平主殿助伊忠カ兵喜見寺ノ砦ヨリ
發ス亦小笠原新九郎及ヒ蜂屋半之丞ニ連木ヨ
リ軍ヲ出シテ小原ト挑ミ戦フ本多平八郎忠勝
時ニ十先鋒ニ進ニテ收野宗次郎ト鎧ヲ合テ勇
七歳
ヲ震フ松平玄蕃元清宗
後ニ備後
寺ト号ス
於龍念寺ニ鎧

本多

ヲ合セ疵ヲ被ル事ニケ竹首五級ヲ得夕リ後卒
三人戦死ス蜂屋半之丞本多忠勝ト先陣ヲ争ヒ
テ進ニ戦ヒ鎧炮ニ中リテ死ス敵味方互ニフル
ニ戦フトイヘトモ雄雄ヲ決セス日黄昏ニ及フ
ノ間小原兵ヲオサメテ城ニ入本多彦八郎ハ吉
田ノ城ノ案内者タルニヨリテ酒井忠次カ陣ニ
加リテ先鋒ニアル本多蜜カニ使テ城中ニ遣シ
酒井忠次ト小原カ交和ヲ結フ互ニ是ヲ聞テソ
ノ事成ル是ニ依テ小原吉田ノ城ヲ避渡シテ駿
河ニ退カント欲ス時ニ小原酒井ト交親ヲ誓テ

内務省

松平

三奉行

三州ノ質ヲ請フ大神君是ヨリ許シ給フテ御同

胞ノ庶弟松平源三郎及ヒ酒井忠次カ娘後松平伊

嫁スニ才ニテ小原ニ遣シ見給フ小原悦七質ヲ携

ヘテ駿州ニ帰ル是ニヨリテ三州平均ニ大神

君ニ後フ于時永祿七年六月十日ナリ

是間三月小

七日大神君三州ノ制法ヲ定ラシ本多作左衛

門尉重次高力與三左衛門尉清長後河内守天野

三郎兵衛尉康景ヲ以テ三州ニ奉行ニ定ラル

五月大

廿七日此日三河ノ國人鈴木八右衛門ニ故アリ
テ證文ヲ賜ル

永祿九年丙寅

五月大

九日三州牛産ノ城主牧野成定卒去ニテ後嗣子

牧野石馬允康成トソノ族牧野出羽守遺跡ヲア

ラソヒテ訶論ニ及フ大神君牧野康成ニ其遺

跡ノ領地亦皆ノ御書ヲ賜ル大神君水野下野

守信元ニ命ニテ牧野出羽守ヲ追故セラレ

十二月小

内務省

内務省

廿九日 大神后從五位下ニ叙シ三河守ニ任シ
給フ

永祿十年丁卯

五月六

廿七日三郎信康時ニ九歳織田信長ノ女時ニ九歳ヲ娶リ

給フ仇久間信盛嫁娶ノ使ヒトシテ岡崎ニ表賀

ス

七月小

頃年氏真遊興ヲ好ミテ武業ヲ忘レ奢侈積惡身
ニアマルコレ亡國ノ端也ト諸人眉ヲヒソム氏

織田

今川

真カ義臣三浦石衛門佑トイフモノアリ其寵

ニ誇リ遊京ノ好ニテコレヲ氏真ニ勸ム彼ノ

三浦石衛門佑ハ小原肥前守カ子ナリ美男夕

ルニヨリテ氏真コレヲ愛シテ今川ノ家ノ臣

三浦次郎石衛門尉カ養子トシテソノ遺跡ヲ

継シム小原肥前守ハ江州ノ人ナリ天文七年

今川義元州熱海へ入湯ス江州ノ位人小倉三

河守トイフモノ此時熱海ニ入湯マ三河守ヲ

招テ畿内ノ軍事ヲ語ラシム是ヲ聞テ義元三

河守カ武功ヲ感シ駿河ニカレヲトメテ臣

内務省

トセント請フ三河守回辞ニテイハク我既ニ
老衰ス仕ヘテソノ功成難シ愚子與助オシテ
駿州ニ往テ義元ニ属シノト約ス三河守江
州ニ帰リテ後翌年ノ春ソノ子小倉與助ニ駿
州ニ来リテ義元ニ仕ル同シク十一年ノ秋八
月三州小豆坂ノ合戦ニ小倉與助尾州ノ豪士
鑑三位ヲ組ミ撃ニシテ首級ヲ得タリ義元是
ヲ賞シテ慇懃ヲ與助ニ與フソノ後小倉軍功
數度ニオヨブノ間義元弥彼ヲ称美スコレニ
ヨリテ小倉ヲシテ其器ヲ撰ハシメ江州ノ宰

内務省

人青木筑後守同姓加賀右衛門尉及ヒ小原肥前
守兄弟坂井以下其餘濃州和州ノ中武名アルノ
士ヲ數輩駿州ニ招キテ義元是ヲ扶持ス小倉與
助卒ニテ後ソノ子小倉内藏助小原肥前守カ男
三浦右衛門佐善氏真ニ仕ル三浦右衛門佐ハ小
番衆ノ隊長ト所小倉内藏助ハ十八人衆ノ頭ト
ナリ兩輩共ニイマタ年若シトイハトモ武名ア
ルニヨリテ氏真是ヲユルス小倉内藏助ハ十八
歳ニシテ永祿三年越州ノ景虎相州小田原ノ城
ヲ畧セント伺フノ時今川援兵トシテ小倉内藏

内務省

助ヲ相州ニ趣カシム小倉小田原ノ城ト拒キ武
州川越ノ城ニ行テ是ヲ守ル時ニ景虎兵ヲ松山
ヨリ發シテ川越ノ城ヲ圍テ攻撃シ小倉是ヲ拒
キ勇ヲフルニ戦功盡ス北條氏康ソノ勇敢ヲ美
テ感状ヲ小倉ニ授テ小倉駿州ニ帰リテ後今川
ソノ武功ヲ褒シテ十八人衆ノ頭ト成三浦石衛
他ハ遠州引間ノ城主釵尾逆意ノ時父小原肥前
守病疴タルニヨリテ三浦石衛門死ソノ軍勢ヲ
卒シテ引間ノ城ヲ攻テ戰功ヲ盡ス氏真兼テ彼
ヲ愛スルニヨリ弥ソノ武功ヲ美称シテ遂ニ小

内
德
宗

織田

番衆ノ隊長トス父小原肥前守ハ永祿七年迄三
州ノ郡代トシテ吉田ノ城ニアリテ父子共ニ其
武列ニ著ル

今川家ノ臣三浦朝比奈葛山齋藤田比福島等ヲ
ハシメテ廿四人先年尾州桶狭間ニシテ義元命
ヲ殞スノ時大ニ敗シ駿州ニ逃カヘルオノオノ
是ヲ耻テ閑居ス是ニヨリテ小原父子及ヒ小倉
等自然ト権ヲ取ル故ニ今川家ノ旧臣是ヲ憎テ
恨ヲ含ヒ多シ氏真カ外祖父武田信虎此時ヲ
伺ヒ野心ヲ企テ今川カ老臣ト議シテ氏真ヲ亡

内
德
宗
勢
少
省

三駿列ヲ奪ヒ取ラントハカル此企露頭スルノ
間氏真大ニ怒リテ菴原安房守ヲ下知ニテ信虎
ヲ追放ス信虎駿列ヲ出奔ニテ京都ニ免ル時信
虎使ヲ甲列ニ遣シソノ子信玄ニ告テイハク今
川家ノ老臣等氏真ヲ背テ我ニ組スルノ間駿列
ヲ畧セント欲スルノ處ニ隱謀露頭ニテソノ事
ナラス遂ニ駿列ヲ去ル汝密ニ謀テ駿列ヲ奪フ
ヘキノ旨ヲ説シハ是ニヨリテ信玄今川カ老臣
等ヲ謀ル各是ニ從フ信玄悦テ駿列ヲ侵ニ奪ハ
ニト欲ス

内務省

信玄傳
開元十五年

信玄傳

内務省

明治八年五月 以岡谷繁系實一所藏之書寫之

課長七等出仕岡谷繁系實督 寫字生 淺井 福井 求校



